



# オーライ! ニッポンニュース

第7回オーライ!ニッポン全国大会には、全国から多くの方々のご参集をいただき、厚く御礼申し上げます。1月25日に事務所を千代田区神田東松下町に移転しました。  
電話番号 03-4335-1985 平成22年4月7日 オーライ!ニッポン会議

## 第7回全国大会開催

平成22年3月10日東京有楽町の朝日ホールにて、第7回オーライ!ニッポン全国大会を開催しました。

日時:平成22年3月10日(水)13:00~17:30  
場所:有楽町朝日ホール(千代田区有楽町2-5-1有楽町マリオン11階)  
主催:オーライ!ニッポン会議、農林水産省  
後援:総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、環境省、観光庁  
参加者:400名

第7回目となる今年度は、オーライ!ニッポン会議が主催・共催する3つの表彰事業(「オーライ!ニッポン大賞」、「食アメニティ・コンテスト」、「山村力コンクール」)の表彰式を始め、オーライ!ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞)受賞地区の事例発表のほか、「消費者の心をぐっと掴む。未来のグリーン・ツーリズム商品を探る」をテーマに、ようこそ!農村へキャンペーングリーン・ツーリズム商品コンテスト受賞者や情報発信のプロを交えて、グリーン・ツーリズム商品の開発から販売の手法について検討しました。

### 【プログラム】

#### 13:00 開会・挨拶

養老 孟司 オーライ!ニッポン会議代表  
赤松 広隆 農林水産大臣



#### 13:15 表彰式

- ◇ 第7回オーライ!ニッポン大賞
- ◇ 第19回食アメニティコンテスト
- ◇ 第4回山村力コンテスト



#### 14:00 受賞事例発表&トークセッション

進行役:平野啓子オーライ!ニッポン会議副代表  
事例発表

- ①大地の芸術祭実行委員会(新潟県十日町市)オーライ!ニッポン大賞グランプリ、②東沢山村留学協会(山形県川西町)山村力林野庁長官賞、③かみなか農楽舎(福井県若狭町)オーライ!ニッポン大賞審査委員会賞



平野啓子氏

#### 15:00 基調講演

##### 「農村文明の時代」

安田 喜憲 国際日本文化研究センター教授  
オーライ!ニッポン会議副代表



安田喜憲氏

#### 16:00 パネルディスカッション

「ようこそ!農村へ」キャンペーン テーマ:「消費者の心をぐっと掴む。未来のグリーン・ツーリズム商品を探る」

##### ●出演者:

★コーディネータ:鈴木賀津彦 市民メディアプロデューサー・東京新聞首都圏編集部記者

★パネラー5人:「受賞者側」(GT商品コンテストの優秀事例3人)

- ①大和 寛(株)わくわくホリデー(北海道)
- ②吉川理恵 庄原市観光協会連合会(広島県)
- ③芳賀 享 鮫川村企画調整課長(福島県)「情報プロ側」情報のプロ2人
- ④中村直美 (株)交通新聞社「旅の手帖」編集長
- ⑤中島康夫 (株)電通クリエイティブ開発センターCI開発部

#### 17:30 閉会・終了



## オーライ!ニッポン大賞

### グランプリ決定!

第7回を迎えたオーライ!ニッポン大賞が去る3月に決定しました。オーライ!ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞)は、新潟県十日町市・津南町の大地の芸術祭実行委員会に。

オーライ!ニッポン大賞は、秋田発・子ども双方向交流プロジェクト推進協議会「子どもの輝き応援団」、地域づくりインターンの会(東京都新宿区)、石部地区棚田保全推進委員会(静岡県松崎町)、農業法人秋津野(和歌山県田辺市)の4件。

審査委員会会長賞は、次の5件。かみなか農楽舎(福井県若狭町)、特定非営利活動法人ふるさと応援隊(兵庫県南あわじ市)、黒潮カツオ体験隊(高知県黒潮町)、柳谷自治公民館(鹿児島

島県鹿屋市)、有限会社やんばる自然塾(沖縄県東村)

オーライ!ニッポン フレンドシップ賞は4件。

このオーライ!ニッポンフレンドシップ賞とは、「オーライ!ニッポン大賞」(都市と農山漁村の共生・対流表彰事業)の趣旨に合致すると思われる各表彰事業と連携のもと、ご推薦を頂きましたものです。

このうち、「オーライ!ニッポン フレンドシップ大賞」が選ばれ、先に選定されている「オーライ!ニッポン大賞」5件と併せて、オーライ!ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞)が選考されました。フレンドシップ大賞は、遅筆堂文庫生活者大学校(山形県川西町)、フレンドシップ賞は、置農MOTTAINAIプロジェクトチーム(置賜農業高等学校内・山形県川西町)、特定非営利活動法人生活工房「づばさ・遊」(埼玉県小川町)、(株)三浦市の営業戦略「みうらシティ・セールスプロモーション」(神奈川県三浦市)

ライフスタイル賞(4件)は5人。

田村義夫・えり子(青森県弘前市)、見永豊子(広島県神石高原町)、金子数栄(長崎県長崎市)、鷺頭栄治(大分県九重町)

平成21年度の第7回オーライ!ニッポン大賞は全国各地から108件(オーライ!ニッポン大賞93件、ライフスタイル賞15件)のご応募を頂きました。皆様のご協力に厚く感謝申し上げます。

グランプリ受賞の大地の芸術祭実行委員会は、地域に内在する地域資源をアートの媒体として世界に発信し、10年かけて地域再生の道筋を築く事を目標に、「越後妻有アートネックレス整備事業」を展開。

その成果の発表の場として、3年ごとに、里山や空き家等を舞台に世界のアーティスト、文化人、都市のサポーターなどと地域住民が協働で現代アートを制作し展示する「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を開催しています。

平成20年に、大地の芸術祭を持続的に発展させるため、「大地の芸術祭」事業の自立を目指すとともに、地域活性化のための企画・コーディネートを担う、NPO 法人越後妻有里山協働機構を設立。また地元の主婦が、地元食材にこだわった食事を提供する「うぶすなの家」レストランの開業、廃校を活用したコミュニティ施設「三省ハウス」の誕生、里親による資金援助や農繁期のサポートで棚田を保全する「棚田バンク」の実施、地域内の小・中学校や、

地域の個性を生かした交流拠点施設(里山科学館「キョロロ」、総合文化施設「農舞台」、越後妻有交流館「キナーレ」、公民館が相互に協力しあい、生業・雪掘り体験などの体験プログラムを開発する「里山体験プログラム」の実施、こへび隊が集落内に常設する約200のアートをガイドする里山アート観光など活動を広げています。

平成12年第1回開催時は16万人だった来場者数も、平成21年第4回開催では、37万5千人に増加、作品展示集落も28集落から92集落に増加、40カ国約350組のアーティストが参加するなど、世界規模で人々を惹きつけ、地域活性化、芸術、国際交流など多様な要素による、地域の資源を有効に活用した独自の地域づくりが評価されました。

フレンドシップ大賞の遅筆堂文庫生活者大学校は、川西町出身の作家・劇作家の井上ひさし氏に講演会の依頼をしたことから始まります。

昭和57年に、当地で講演を行った井上氏から、小松地区に劇場を創りたいとの申し出があり、その計画は実現されなかったが、昭和58年に井上氏が劇団「こまつ座」を立ちあげ、山形で公演を開始。井上氏との交流がさらに深まる中で、図書館を作りたいという川西町の青年たちの思いを形にしようと、井上氏が所有する7万冊の蔵書が川西町農村環境改善センター2階に運ばれ、井上ひさし氏の雅号を

付けた「遅筆堂文庫」が誕生。年間 5,000 冊ペースで増えており、現在 22 万冊の蔵書を誇ります。

本文庫の校長は井上氏、教頭は山下惣一氏が務め、生活者の視点から農業を学ぼうと「生活者大学校」を開校。講師は、ヘンリー・クリーガー氏(アメリカ)やロジャー・パルバース氏(オーストラリア)など国内外から招き、年に1回のペースで、全国から受講者を募集し、毎年 200 人以上の参加者が、川西町に滞在している。これまで 22 年間で参加者は延べ 5487 人になり、生活者大学校の取り組みは、地域内外に刺激を与えており、定住をする人が出てきたり、福島県、神奈川県への生活者大学校分校の動きへと繋がっています。

また、毎年受入を行う中で、川西町グリーンツーリズム研究会が誕生。地元食材を活用した食事の提供や、受講者の受入など、活動のサポートを行う、平成 6 年に、井上氏と青年達の念願だった演劇専門のホールと遅筆堂文庫が入る複合施設「川西町フレンドリープラザ」が誕生。

また平成 20 年には、地元の洋菓子・パン製造会社が出資し、山形市内にホール機能を持った「遅筆堂文庫山形館」(3万冊)が完成しました。

井上氏の出逢いにより生まれた図書館を核に、生活者大学校という交流事業に取り組み、地道な活動がさまざまな効果を生んでいます。(「JT交流文化賞」株式会社ジェイティビーよりご推薦。)

★毎日新聞:朝刊全国版に掲載(2月25日、26日付) 全国大会開催の告知、グリーン・ツーリズム商品普及の事例紹介及びパネルディスカッション等



★交通新聞社「旅の手帖」(4月号3月10日発売)に掲載。優秀賞の広島県庄原市の神楽体験ツアーのレポートとその他 4 点の案内。グリーン・ツーリズムへの大きな期待が寄せられている。

★サンデー毎日(3月30日号)に掲載

Articles from Sansei Shimbun magazine, including 'Green Tourism Product Contest' and 'Consumer's Heart'.

# ようこそ！農村へ

グリーン・ツーリズム商品コンテスを核にした「ようこそ！農村へ」キャンペーンは、3月31日、企画委員会(丁野朗 座長、井上弘司座長代理他 7 名参加)を開催し、平成 21 年度のキャンペーン活動の取り組み結果と平成 22 年度の取り組みについて、意見交換を行ないました。主な意見は、①5 件の優秀賞のモニターツアーは、参加者へのアンケートを実施しており、ツアー毎のアンケートを詳細に分析するとグリーン・ツーリズム商品へのターゲットとニーズが分かるのではないかと。②このツアーを実施した旅行会社として得たもの、判ったことが他の地域にも参考になるのではないかと。③特に商品の売り方の虎の巻が受入れ地域に参考となるのではないかと。

④優秀賞にはもれた他の61件の地域へもフォローが必要だ。など初年度実施結果から新たな対策の方向性が見えてきました。

また、⑤最近の観光を取り組む情勢として、有休休暇の消化を大企業は促進しているが、中小企業は昨年来の不景気により有休休暇消化率が減少している、それが旅行人口減少に結びついていると、景気の影響をモロに受けた状況であること。

⑥若者、特に男性の旅行率が低下していることから、親子の体験、家族のグリーン・ツーリズムなどの新たな視点での促進が重要ではないかと意見がありました。

今後は、グリーン・ツーリズム、エコツーリズム、観光資源など縦割りで地域の資源を発掘・商品化するのではなく、地域そのものを上手にかいたツアーで、交流を進めていく必要性があります。

国民の農山漁村への関心は高く、優れた取組を実施しているオーライ!ニッポン大賞の受賞地区の旅行商品化が大いに期待されることと。グリーン・ツーリズム商品コンテストを含む「ようこそ！農村へ」キャンペーンは平成 22 年度も実施する予定です。より多くの地域、関係者からの応募を期待しています。

なお、平成 21 年度のキャンペーン活動の終盤ではマスメディアによって、グリーン・ツーリズム商品コンテスト優秀賞のモニターツアー結果や全国大会における事例紹介、「消費者の心をぐっと掴む未来のGT商品を探る」をテーマにパネルディスカッションを行い、その概要もサンデー毎日で紹介しました。

Report on the Shikoku Shinkwa festival, including photos of participants and text about the experience.

Report on the Green Tourism Contest, featuring photos of award-winning products and text about the competition.

Itinerary for the Ohrai! Nippon tour, listing dates, locations, and activities.

Report on the Green Tourism Contest, featuring photos of award-winning products and text about the competition.